

デンマークは、私達の隣にあった

黒田博文

★私は見た範囲では...

「デンマークでは経管栄養の人が

居ないんだって」

帰国後、職場の昼休憩の雑談でのケアワーカーさんの言葉である。デンマークでも経管栄養を行っているのか、私に尋ねられたので、病院などは見えていないのでわからないが、自分が訪問した高齢者施設では経管栄養はしていなかったと答えたのである。

もちろん、デンマークで経管栄養などの代替的な栄養摂取の治療やケアがされていないかどうかはわからない。あくまでも、「私は見た範囲では...」という限定付きの話なのだから。でも、彼女、そのケアワーカーさんが、「居ないんだって」と仲間に言いたくなった気持ちは、なんとなく理解できた。私だって辛いから。

★デンマークどうだった

正直、飛行機で往復 22 時間もかけて福祉の現場を見学させてもらったからといって、私の仕事が変わったわけではない。10 日間の休みを許してくれた同僚達が、私を聖地巡礼から帰還した勇者として見てくれるようになったわけでもない。職場復帰したその日から、「黒田さ〜ん」「看護師さん」と、いいように使われる日々が再開しただけである。

しかし、職場の方々が、私が見聞きしたデンマークの事情に無関心と言う訳でもなかった。しばらくの間は、何人かの方々から「どうだった？」と尋ねられたし、私の話を興味深く聞いてもくれた。

★新鮮な驚き & 純粋な憧れ

そんな時に、私が一生懸命語ったのは、む



しろ子育ての事情についてだった。学童保育の施設で子ども達がいかに逞しく育っているか、保育園児達がどんなに元気か、そして、バスの学舎と森のフィールドを持つ幼稚園がデンマークにはあること、等々。無理やりなたとえだが、デンマークのクッキーの様に、ナチュラルでスイートな印象を、デンマークの子育てに感じた。

それは、子育てについて全くの素人である私には新鮮な驚きだったし、純粋な憧れでもあった。

★いつかは日本でもが・・・

多分なのだが...最初にデンマークの高齢者ケアを見た日本人達も、似たような驚きを抱き、純粋に「いつかは日本でも」と心に抱いたのかもしれない。だとしたら、その純粋さが私達の国を危うくしたことを嘆かすにはおれないのだが。デンマークと日本とでは、ファンダメンタル(基礎的)な条件が違いすぎる。それを弁えずに北欧福祉論を振りかざせば、不幸な結果に至りかねないことに、彼

らは気付かなかったのであろうか？

★まだまだ日本は遅れていると思う。

高齢者ケアについては、「日本とあまり変わらないよ。私達も結構頑張っているんだなと思った」と同僚達には答えていた。

実際、車いす・ベッド・歩行車などの介護機器にしても見慣れたものが多かったし、トイレやシャワー室の手すりは圧倒的に日本の施設の方が整っているだろう。まさに、「痒いところに手が届く」ほどに。あるいは、パソコンや iPhone を使ったベッド管理や記録などは、見た範囲では、私達の方がやりやすいなと感じたのである。私達はグループごとにタブレット端末を使用しているが、それでも、利用者が納得できるまで補助器具を調整してくれる、専従の OT が市のセンターに常勤しているといった運用面では、まだまだ日本は遅れていると思う。

「物」に関しては日本も高品質なものが増えているし北欧の優れた製品をどんどん輸入しているのだが、「使う」という肝心な場面で、日本はまだまだ課題が多いのだと思う。そういうことは、同僚にも理解してもらえるように話しているし、自分の課題としても受け止めている。ロスキレの補助器具センターのような機能が、浜松市にもあればと願わずにおれない。

★事実を現実としてみていく

ただ、その違いを、“個人の尊厳”や“人権”など、抽象的な概念に引き上げてしまって考えてはいけないとも考えている。

冒頭に記した経管栄養についても、そのケアが対象者の人権や尊厳を危うくしていることは、私達も理解している。だから、私達は辛いのである。でも、それを前面に出して私達が経管栄養の実施をボイコットすべきなのだろうか。その反乱が波紋を呼び、ある

いは、大きなうねりになるかもしれない。でも、そんなドラマチックな展開のために、一体、誰が、どれだけ犠牲になるのだろうか。

デンマークには、経管栄養の人が居ないのかもしれない（実際のところはわからないが）。あるいは、寝たきりの人も居ないのかもしれない。でも、日本には、居るのである。私達の目の前にケアを必要とする人々として横たわっている。その事実を現実として、私達はこれからもケアをし続けるであろう。

★デンマークの豊かさ

では、この研修で私が学んだのは、何だったのか？デンマークの豊かさである。国土も人口も日本の何分の一と少ないのだが、デンマークの国土の中で可住地面積は 9 割近く、農地面積は 6 割である。日本は、可住地が 3 割、農地は 1 割である。一人当たりの GDP もデンマークは日本より 1 万ドル以上も多い。人口が多い分だけ、トータルの GDP は日本が 10 倍以上多いが、実質的にはデンマークの方が、はるかに豊かな国土と国民を擁していることを実感した。というか、我々の国が貧しいのである。そのことは、現地に行って骨の髄まで感じた。

★私達が行くべき先は

でも、貧しさは、決して恥では無い。「天まで耕せ」とばかりに棚田を造って稲作を護ってきた先人達の努力を恥じる日本人はいないであろう。

米国式の大量生産の仕組みや品質管理を学び、世界有数の技術立国となった 20 世紀後半の日本企業を誇りに思っても良いと私は考えている。

同様に、高齢化の荒波にあらがいつつ、目の前の利用者さん達と日々を共にする私達の仕事も、いつかは何かのいしずえになるのかもしれない。認知症のフロアに鍵をかけ、

ものも言えない老人にチューブから流動食を流し込む私達の仕事は、批判の目に晒されることも多い。

でも、「あの時のケアは酷かった」と振り返って言われる方が幸せであろう。間違っても、「あの時の方がマシだった」と懐かしむ声が未来にあってはならない。私達が行くべき先は、デンマークではない。瓦礫の様な貧しい大地を踏みしめ、身を屈めて耕していく道の続きなのである。

平屋建てでガーデンも菜園も、乗馬場すらもある施設を思い出す度に、デンマークの豊かさと日本の貧しさとを感じずにはおれない。

それでも、嫉妬や焦燥を感じることは無い。他人の幸せを喜べないことほど不幸なことは無い。頂いた研修資料1の内村鑑三の紹介にある通り、デンマルクの人々も苦闘を経ることで得た豊かさなのである。彼らの努力を称賛こそすれ、貶めることをすべきでない。

★日本で可能な豊かさを追求する

日本の国土の7割近くになる森林を切り拓くことはできない。無理なことをすれば、自然からのしっぺ返しが来るであろう。ならば、私達はその日本で可能な豊かさを追求するほかないし、その答えが、加工貿易を主とする技術立国化であったのであろう。

しかし、20世紀の成功が21世紀の幸福を導く保障はない。高齢化の暗闇とグローバル化の嵐のただなかを進まねばならないとしたら、それでも私達は北欧のようなケアを目指すべきなのだろうか？

★日本だけが苦しんでいるわけではない

今回の研修で、私は気付いた。デンマークは、私達の先ではなく、私達の隣にあったことを。飛行機で11時間の距離はあるが、確

かにデンマークの人々も私達と同じレースをしているのである。

移民や難民の問題はグローバル社会では避けられない。それは、貧富の格差を生む。

生粋のデンマーク人ではない、全く異なる人種・文化との融合を課題としていることは、街のそこかしこで見ることができた。また、急速な高齢化は先進国共通の問題である。日本だけが苦しんでいるわけではないし、北欧が答を持っているわけではない。

行き過ぎた民主主義の弊害は、古代や現在のギリシャの例を持ち出すこともない。

2003年、あるいは2009年の日本も似たようなものではなかったか。そのようなデマゴグも先進国に共通の課題であろう。

もちろん、北欧の背中を私達が追っているところもある。デンマークの豊かさは、私達の永遠の憧れかもしれない。しかし、苦しいなか、懸命に走っていたら、「独りじゃないよ」と北欧の仲間達が声をかけてくれた、という時代がすぐ近くなのかもしれない。

そのような、一筋の希望を見出した研修旅行であった。

デンマークのクッキーとビスケットは美味しかった。それだけで、行って良かったと心から思う。



(写真は、ロスキレのスーパーで、妻が皆さんと探して買った、ビスケットです。)